



TITLE:

獨逸の工業地域-其の發展と構[造]
](八)

AUTHOR(S):

クリスペンドルフ; 安[藤], 鏗一

CITATION:

クリスペンドルフ ...[et al]. 獨逸の工業地域-其の發展と構[造](八). 地球
1935, 23(6): 462-469

ISSUE DATE:

1935-06-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184430>

RIGHT:

獨逸の工業地域——其の發展と構造（八）

クリスペンドルフ著

安 藤 鏗 一 抄 譯

【柏林(Berlin)とマルク・ブランデンブルグ
(Mark Brandenburg)】

獨逸工業の主體をなす二つの大工業地帯の外側にはバイエルンの島狀工業地域の外に尙大柏林及び工業化の程度は低いがマルクの地區が存在する。併し後者は空間的には南東より北西に向ふ工業地帯と結合してゐる。

帝國の首府柏林は莫大な人口數のためにその勞働者の絶對數からすれば獨逸最大の工業都市である。併し乍ら相對的には帝國の平均と略々一致する。此の點で柏林はエッセン・ハッレ・ケムニツ等の如き明白な工業都市と同一にするこ

とは出來ない。又個々の工業部門を觀察して見ても只若干のものが帝國の平均以上に出てゐるに過ぎない。この少數の平均以上のものの中で第一に擧げられるのは電氣工學的工業である。この工業に屬する全獨逸の勞働者の中でその五分之二が柏林に住んでゐる。それに續くものとしては機械工業があるが前者に比すれば遙かにその意義が少い。我々は既に電氣工學的工業が若干の少數の大都市例へばケルン・フランクフルト (Frankfurt am Main)・シュトゥットガルト (Stuttgart) 等に集中してゐることを知つた。これは大都市に特に智識のある勞働者が存在す

ると云ふことに多く基いてゐる。他の質的な勞働指向的工業の主な立地要因は代々傳へられてきた手の技術なのであるが、電氣工學的工業にあつては智識のある勞働者が肝要なのである。伯林に於て消費指向的工業が盛なことは四百萬と云ふ莫大な人口數を考へれば自明のことである。それに反して典型的な原料指向工業は全然消滅しないまでも非常に衰へてゐる。とにかく伯林で起らなかつた工業は殆どないと言つて差支へなからう。

伯林に工業が盛なのは帝國の首府でありそれによつて規定された多數の智識の高い人々の存在することの御蔭であると言ふことが出来る。

マルク・ブランデンブルグが他の北獨逸の平原と異つて僅かではあるが工業化されてゐるのは此處の中心に伯林が存在するからである。此處はその工業の種類からすれば雜工業地域である。多くは消費指向的工業であつて、特に機械工業が盛である。又フランクフルト アム オ

ーデルの地方にある褐炭鑛山も忘れてはならない。

【海岸工業地域】

海岸工業地域はいづれも大體に於てすべて同様な、或は相似た狀態を示し、その區別は個々の現象の構造によつてなされるのでなく、只程度によつてなされるのであるから、我々は其等を一括して取扱ふことが出来る。彼等のすべてが共通點を持ち、且彼等がすべて他の既に言及された工業地域から自らを區別する所以は彼等にあつては次に述べる如き工業が卓越してゐる故である。即ちその工業とは直接海岸に結びつけられてゐるか、或は技術的又は經濟的な理由から内陸の工業の中心地へ陸上輸送で運ぶことの出来ぬ原料を加工する工業を指すのである。

海岸工業地域はすべて獨逸の大河の河口にある港灣都市の周圍に存在する。即ちそれ等は小さなエムデン (Emden) 地域、比較的大きなブレメン (Bremen) 附近の工業地域、ハムブルグ

(Hamburg)・リューベック(Lübeck)・キール(Kiel) 附近の最も重要な海岸工業地域、シュテッティン(Stettin)・ダンツィヒ・ヒュルビング(Danzig = Elbing)・ケーニヒスベルグ(Königsberg) 附近の東海(Ostsee)地域に區別される。或意味に於ては之等の海岸工業地域の中に海岸にこそ臨まないがチルジット(Thiſſi)の小地域を數へることが出来るかも知れない。又ライン・ウエ・スト・フアイレンの工業地域の中で言及したニーダーラインのウエーゼル及びクレーヴェ附近の小地域もそれに數へられるかも知れない。

個々の工業部門を観察してみるとすべての地域で機械工業が群を抜いて盛である。これは造船工業が含まれてゐるからである。造船工業は海岸工業の中で最も重要なものである。獨逸が大海運國の仲間入をして以來造船工業の飛躍が起つた。又本來消費指向的である機械工業は多く造船工業の補助工業をなしてゐる。造船工業と同じく魚類罐詰工業も狹義の海岸工業に屬し

てゐる。主として北海(Nordsee)の港灣に存在し、アルトナ(Altona)とウエーゼル・ミュンデ(Wesermünde)はその中心である。

腐敗し易いとか或は他の理由から内陸に運ぶことの困難な原料を加工する工業は本來の海岸工業よりも種類が多い。

この工業には紡績工業の中の羊毛梳工業・黄麻工業・大麻工業が屬してゐる。羊毛紡績業と羊毛織物業が主として内陸の工業地域に集中してゐるのに反して羊毛の清洗は海岸で行はれてゐる。何故なら原毛は海外から輸入されるので多量の屑を含み、重い不純な羊毛の輸送は無駄な運送費を生ずるからである。それでハムブルグやブレメンには無數の羊毛梳工場が見られる。原綿は羊毛程多量の屑を含みぬので清洗されずに加工地域に供給される。黄麻と大麻は港灣都市で織物まで加工される。紡績工業の多くの部門では原料の運送費は僅少な役割しか演じて居らない。何故なら労働が加へられること

によつて生産品は高い價值を持つことになるからである。併し黃麻工業と大麻工業は例外である。何故なら之等の工業の製品(袋・綱等)は僅かな價值しか有せず、多額の運送費を負擔出來ぬからである。それ故黃麻工業及び大麻工業は多く海岸か或は少くとも海岸から容易に水路を到達し得る場所に集中する。

皮革工業も外國の原料が加工されることになつて以來海岸にも或程度存在してゐる。ノイミンスター(Neumünster)は皮革工業の重要な中心をなしてゐる。又ゴム工業も大部分海岸に在る。

海岸工業地域では食料品工業及び嗜好品工業も大きな意義を持つてゐる。葉巻工業・搾油工業及びそれに基く人造バター工業が盛に起つてゐる。搾油工業は殆ど全部外國の原料(大豆・亞麻の種子等)を加工する。この工業は加工の際に非常に大きな重量喪失が発生するので立地は原料產地即ち獨逸の場合は港灣都市に存在す

る。搾油工業は特にハンブルグ地方に集中して居り、ハムブルグ＝ウィルヘルムスブルグ(Hamburg＝Wilhelmsburg)は歐洲で最大の搾油工業地をなしてゐる。又ウーゼル及びクレーヴェ附近のニーダーラインの地域にもこの工業は盛に起つてゐる。原料は内陸水路を和蘭を通つて持つて來られる。

人造バター工業は搾油工業と密接な關係がある。即ち前者は後者の製品の主な顧客である。勿論理論的には僅少な重量喪失が発生するに過ぎないから人造バター工業は無條件に搾油工業の立地に結びつけられることにはならないわけである。併し事實上は尙工業の立地は大部分一致してゐる。ハンブルグには全獨逸人造バター工業労働者の四分之一が集中して居り、ニーダーラインの地域では全體の五分之二がこの工業に従事してゐる。

之等の工業は全然皆無と云ふのではないが東海(Ostsee)の諸港灣より北海(Nordsee)の諸港

灣に多く見られる。東海の港灣ではその代りに北歐及び東歐から送られた原料を加工する工業がより大きな役割を演じてゐる。就中製材工業・製紙工業が盛で共に露國及び瑞典の木材に基礎を置いてゐる。ケーニヒスベルグ及び海岸にこそないが同様に木材の輸入地であるチルジットがこの工業の中心をなしてゐる。

獨逸の海岸に存在する重要な工業の中で最も歴史の新しいものは大鐵工業である。技術的變化、特に燃焼技術の變化によつて石炭産地が無條件に鐵の精鍊のために最も都合の良い場所として見られなくなつたことは既に述べた。即ちルール工業の一部分がロートリンゲンのミネッテ鐵石産地に移動する傾向を確かめることが出来た。それと同じく瑞典と西班牙の鐵鑛の輸入港への移動の傾向も當然見られなければならない。併し此の方は輸入される鐵石がミネッテ鐵石より遙かに鐵の含有量に於て高いので比較的規模が小さかつた。何故なら鐵石の精鍊工

業に對する牽引力は鐵石の價值が少い程、即ち鐵の含有量が少い程大となるからである。とにかく常に鐵工業の移動の危険は存在してゐるのであつて、事實盛と言へぬまでも獨逸の海岸には大鐵工業が發生してゐる。最初の熔鑛爐工場は前世紀の末にシュテッティンの附近にオーベルシュレジェンの企業家によつて建設された。オーベルシュレジェンの重工業が如何に恵まれぬ立地的な狀態の下に作業を營んできたかと云ふことに就いては既に述べるところがあつた。かゝる事情から重工業の移動は當然起らなければならなかつたのである。續いて熔鑛爐工場が主としてリューベック・エムデン・ブレメンに起された。之等の工場の中でその一部分は原料ばかりでなく燃料たる石炭も外國に仰いでゐる。石炭は英國炭である。英國では石炭の産地の一部分は直接海岸にあり、鐵道及び内陸航行による輸送が不要であるため獨逸の海岸に於ても獨逸炭と競争することが出来るからである。海岸

に新しく發生した重工業はその大部分が其の土地の造船工業のためにその作業を營んだ。

結 論

獨逸の工業地域の觀察に於て我々の眼前に展開した狀態は非常に雜然としたものであつた。我々は非常に多數の種類の工業の充填を知つた。彼等の中では特定の場所に集中するばかりでなく、又獨り支配的に集中してゐるものすらある。併し多くのものは寧ろ相互に萬遍なく行き亘り、多くの場所で非常に異つたコンビネーションの下に起つてゐる。かゝる多様性の中に一定の秩序をもたらしすることは非常に必要である。

個々の工業地域の構成が各々異つてゐると同じく、その歴史及び個々の工業部門の定着の基礎も亦各々異つてゐる。我々は石炭産地・褐炭産地及び他の天然資源の産地が原料指向の工業に對する立地として重要な意義を有することを知つた。又勞働指向的な工業の定着に對する人

口密度の意義を知つた。更に現在の立地要因は現在の工業の分布の中で其の一部分に對してのみ決定的であると云ふことを知つた。我々は完全に狀態が變化したにも拘らず多くの工業が依然として現在も過去の立地を固守してゐることを知つた。併し又同時に我々は個々の工業部門の廣範な移動を確かめることが出來た。我々は各々の立地要因が技術或は經濟狀態の特定の發展段階に到達して後始めて或工業の發生又はその消滅を規定したと云ふことを屢々注意した。我々はそれで技術と經濟組織が個々の要因の作用に對して決定的な意義を有するものであることを認識することが出來たのである。我々は工業の地方化に對して常にその説明を手許に用意してゐたわけではなかつた。我々は屢々偶然的な狀態或は個人の發案が唯一の要因である場合を認めなければならなかつた。かうした場合の因果的な説明は獨逸の工業分布に於て示された如き非常に混亂した狀態を來たさしめる。そし

てそれに依つて獨逸の工業分布は歴史の古い歐洲の文化中心地に於ける工業の分布と同じく若い工業國に於ける工業の分布から區別されるのである。(完)

後記

兎に角以上でクリスペンドルフの獨逸の工業地域に關する一書の抄譯を不充分乍ら終へたわけである。譯者が未熟なために文章も拙く、且不適當と思はれる譯語を數多く使用したことを讀者に御詫びせねばならない。尙獨逸の行政單元と考へられる *Regierungsbezirke*, *Bezirke*, *Gebiete*, *Kreise* 等に關してはそれが如何なる程度の内容を表現するものであるかわからぬために全部省略した。従つて地名の下に地域或は地區と示ふ言葉が附せられてゐてもそれは特定の行政單元の譯語ではなく單に地方と云ふ莫然たる意味のものであることをお斷りして置く。彼の地理學の傾向が如何なるものであるかは彼の著書として本書一冊より讀んだことのない譯

者にとつては推察の困難な問題である。併し本書に關する限り彼の態度は一應明かである如く思はれる。彼は緒言の冒頭に於て「獨逸の工業の狀態を敘述し、且出來る限り説明することが本書の課題である」と述べてゐる。かゝる態度は經濟狀態の敘述と説明に經濟地理學の課題を認めたニコラウス・クロイツブルグ (*Nikolaus Creutzburg*) やアルフレッド・リュートン (*Alfred Rühl*) の立場と同様であると見られる。而してテオドール・クラウス (*Theodor Kraus*) によればクロイツブルグやリュートンは地理的經濟學者なのである。又結論に於て彼は各々の立地要因が技術或は經濟狀態の特定の發展段階に到達して後始めて或工業の發生又は消滅を規定したことを述べて、技術と經濟組織が個々の要因の作用に對して決定的な意義を持つものであることを認めてゐる。佐藤弘氏は經濟地理學の傾向を論じられて、(一)ラッチェル式の素朴的地人相關論(二)ハットナー式の交互作用の理論、(三)ウィットフォ

「ゲル・ハルムス」の社會の生産諸關係より説明する交互作用の理論の三に分けて居られるがクリスペンドルフの態度は大體其の最後のものに該當するわけである。佐藤弘氏は獨逸の地理的經濟學者は多く(三)の態度を取つてゐると述べて居られるが、彼を本書に關する限りに於て地理的經濟學者の一人に數へることは決して不當ではないと思はれる。

註(1) 拙稿 經濟地理學と立地論 地理教育 第二十一卷

第一號

(2) 佐藤 弘 人文地理學六講 昭和九年 二一五頁

新著紹介

○地 學 辭 典

加藤武夫監修 古今書院 定價十二圓

五月五日までならば特價十圓といふことであるが、まだ索引がついてゐない四六版一七二六頁、裝幀も紙も立派な美本で、實にこゝ數年來待望の辭典であつた。筆者はこゝまで立派に出来たことを地學のために喜ばざるを得ない。加藤先生の監修で當代の専門家五十數氏が各部門の主任の下に分屬し

て、地學に關係するあらゆる科學の術語を網羅された努力に就てはかうしたことに經驗のないものには其苦心は殆ど理解されないであらう、形式は百科辭典に則り、程度は大學講義標準といふことである。英獨佛の三ヶ國語を併記し、邦文術語は各執筆主任の選定による標準語を記されてゐる、使用のローマ字も日本式であるが、キ・エ・ラ・デ・ヅ・クワ・グワに關しては日本式綴方を用ひないものであるのも引得には便利な心遣ひであらうと考へる、何れにしても地學辭典の薄い一冊しかなかつた明治・大正の地理學界を顧みると、本書のごとく一萬數千個にも近い學術語が、責任ある學者の解説を以て世に出たことは何といつても文化日本の進運を語るものとしなくてはなるまい、希ふ所は一日も早く、これらの各語全般に亘る索引が出来るべきことであらう、遅くとも五月末にはこの書に現はれた學術語すべての索引が出来るといふことであるが、それが出来て共綴にでもなつたならばその便益眞に測るべからざるものがあるであらう、古今書院は索引を別冊にするといふが、別冊では取扱ひが不便であるから、何としても共綴のものが裝幀されて發賣されなくてはならぬ、恐らく一般の讀者も亦右の別冊が共綴して世に現はれるまで之を買ふのを待つ方が多いことゝ考へる。(藤田)

○農 村 の 工 業

大河内正敏著 岩波書店發行 定價八十錢
日本が英國の舊式工業に師事してゐる間は日本産業は發展